
ごめんね

雪音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ごめんね

【コード】

N1844M

【作者名】

雪音

【あらすじ】

「ごめんね」その一言が小さな僕にはいえなかった。

きつと、僕が思っている以上に君は大切な人だった。
好きとか、愛とかそんな感情じゃない。

君は男だし、僕も男。それに僕普通に女の子好きだし。
ただ、君はとても大切な人だった。

どこが？って聞かれちゃったら、きつと答えられないと思うけれど。

初めて会った時から、君とずっと一緒に居たいって思ったんだ。
勉強だって、スポーツだって楽々とこなせてしまう君に追いつくた
めに人一倍努力したと思う。

君が僕の学力じゃ難しい高校に進学するといったときから僕はコッ
コツと自分の学力を上げていった。

夏休みとかの長期休みは僕にとって地獄でしかなかった。
頭が狂うと思うほどに勉強だけしていたから。

きつと、あれが人生で一番勉強していたときだと思う。

この僕の努力が報われたと感じたのは受験の合格発表の日。

君と確かめた掲示板に僕と君の番号を確認したとき。

万歳三唱！とか言って、大勢の前で君を無理やり巻き込んで万歳を
したね。

すごく恥ずかしかつたけど、君も笑って僕も笑った。すごくいい思
い出だよ。

高校生になって、君と一緒にたくさんのことを学んだ。

難しく、何度も壁にぶち当たってそのたびに君は僕を励ましてく
れて。

そのおかげで僕はここまで成長できたんだ。

君と一緒にいるとどんな辛いことでも幸せに感じた。

そんな幸せがずっとずっと続くと思っていた。

でも……。

今でも後悔してしまうあの日。
瞼を閉じれば鮮明に思い出される記憶。

あの日僕は君とけんかをした。

他人に言わせれば、どうしてそれでけんかに？って聞かれそうなくらい些細なことだ。

『もういい。もう知らない。勝手にしろよ』

君が言った言葉。今でもよく覚えてる。

ここですぐ謝ればよかったんだ。そうすればきっと何か変わってた。でも、僕は謝れなかった。ちっぽけなプライドのせいで。

怒って教室を出て行く君の背中を横目で見送った。

……明日、謝れば良いよね。

僕はそんなことを思いながら無人の教室で無駄な時間を過ごした。

次の日は早くに起きて登校した。少しでも早く君に謝りたかったから。

けど、君は学校に来なかった。

これがただの体調不良ならよかったのに。

朝の会で担任の開口一番が悲しいお知らせ。

『　　が、昨日交通事故にあって』

……死ん……だ？

ありえないと思った。なんかのドッキリだと思った。

君が死ぬはずが無いと、こんなに早く死んでしまうはずが無いと思っ

た。

でもそれは変えようの無い現実だ。

僕の心をひどく苦しめた。
君の葬式に出席した僕の頬からは、なぜか涙は流れなくて周りの人

がボロボロ泣いているのを少し離れたところで見つめていた。まるで実感が無かった。

これが現実だとわかっているのに、まるでテレビの中のドラマを見ているみたいだった。

誰かが言った。

『みんな、最後のお別れをしるよ』

最後という言葉が僕の頭に入ったとき、僕は君の顔を見ることが怖くなった。

君の顔を見たら、君が死んだことを認めてしまう。

認めてしまったら、本当に全てが終わってしまう。

そんな気がして怖かった。

だから僕は、君の顔を見る前に一人抜け出した。

丁度タイミングよく親が仕事の転勤で他県に行くことになり、数日

後に僕は君から逃げるように引越しをした。

あれから3年の時がたった。

僕は今、君の名前が彫られた墓の前にいる。

逃げ出してしまった僕は3年ぶりに君に再開をした。

本当は来たくなかった。ここへ来るということは3年前に葬式で君の顔を見ることと同じことだから。

でも、今ここへ来てわかったことが一つある。

それは君の死を認めることが最後になるわけじゃないということ。

どちらかといえば最後というより始まりになると僕は思う。

3年前から外側の周りの時間ばかり過ぎていた。内側の心の時間は君の葬式のと時から止まったままで。

それが動き出すのを感じた。

ここへ来たのが間違じゃないと。

君に会って、死を認めるのが間違じゃないと思うことができた。

僕の頬にはいつの間にか涙が伝っていた。

本当は3年前の君の葬式で流すはずの涙。

それを感じたとき、僕の口から言葉が漏れた。

「ごめんね」

口から自然と漏れた言葉。君への謝罪の言葉。嬉しさと肩が軽くなるような感じがした。

そして同時に自分自身を責めたくもなつた。

どうしてあの日、謝らなかつたのか・・・。

謝ることができてたら君は僕のそばにいたかもしれないのに・・・。

こんなにも素直に謝れるのならどうしてあの日、謝らなかつたのか。どうして・・・どうして・・・。

自分を責めている僕の周りにやさしく風が吹いた。

その風の中、聞こえた。

(いいよ)

聞き覚えのある声。君の声。

もしかしたら、気のせいかもしれない。

風の音を聞き間違えたのかもしれない。

でも、僕にはそれが君が許してくれた合図だと思えて仕方が無い。

僕は泣きべそを掻いていた顔を服で拭い、君の眠る墓を見つめる。

泣き止んだ顔でニコツと笑顔をつくつた。

久しぶりに心からの笑顔を君に向ける。

少しの間そのまま墓を見つめていたが、腕時計が帰る時刻をさしていることに気づいた。

名残惜しそうに数秒見つめた後、くるっと後ろを向き歩き出した。

「・・・」

帰ろうとしたとき、ふと思いついて僕はもう一度後ろを向いて小さくなつた君の墓を見た。

少し離れたその場所から墓に近づくことはせずにやさしく笑いかけ、言った。

「ありがとう」

不思議と心がとても温かい気分になった。
もう一度帰路に着こうとした僕に風が吹く。
耳を澄ませても声らしいものは聞こえなかった。
でも、君が笑っているような気がして少し嬉しかった。
・・・笑っていると感じたのは僕の気のせいかもしれないけれど。
ふふつと笑いながら、僕は動き出した心の時間と共に前に向かって
ゆっくりと歩き出した。

(ふ)

誰もいなくなつた墓場で、どこからか静かに幸せそうに笑う声が聞
こえた。
それは小さく木霊し、風に溶けるように消えていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1844m/>

ごめんね

2010年10月21日22時27分発行